

「主イエスと出会う」

(ヨハネによる福音書 14 : 15-21)

ヨハネの手紙やヨハネによる福音書などのいわゆるヨハネ文書が記されたのは、主イエスが昇天されてから数十年後とされています。ですから著者は主イエスに直接会ったことはありません。にも関わらず、これらの文書は時を経てなお、たしかに命の言なる主イエスと出会い、触れ、その声を聴いた事実を語ります。どうしてそのようなことが起こり得るのでしょうか。ヨハネ文書が繰り返し語ることはこうです。主イエスとあなたが互いにとどまるなら、あなたは主イエスと今なお出会い、触れ、その声を聴くことができる。そのために、主イエスはあなたの内にすでにとどまっておられる。だから、あなたもその主イエスにとどまるなら、時空を超えて主イエスと出会える。今日の福音書で主イエスが「あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいる」と仰っている通りです。では、主イエスがわたしたちの内にとどまる、とはどういうことなのでしょう。

主イエスは命の言ですから、たとえばそれはみ言葉としてわたしたちの内に宿る、ということだといえます。幼いころに聴いたみ言葉が長い年月を経て思い出され、信仰に導かれるということがあります。これは、み言葉によって命の言なる主イエスが宿られていたからに他なりません。主イエスがみ言葉として宿ってくださるからこそ、わたしたちはみ言葉を心に留め、そのみ言葉との交わりに身をおくなら、わたしたちはみ言葉を通して、主イエスと今、出会うことができます。生活のなかで、人生のあらゆる場面でみ言葉と交わりながら生きる。そのとき、み言葉を通してわたしたちはまさに直接耳で聞き、手で触れるほどに、主イエスとの出会いを経験するので

す。

主イエスがわたしたちの内にとどまるということは、聖餐によっても起こるといえるかもしれませんが。主イエスはパンとぶどう酒によってわたしたちの体の一部となり、わたしたちに宿ってくださいます。知性も理性も超えて、肉体そのものになってくださいます。そうして、わたしたちを体ごと主イエスと共にある命へと変えてくださるのです。主イエスはこうして、み言葉によって、そして聖餐によってすでにわたしたちのうちに宿り、わたしたちをご自分との出会いへ、交わりへと招いておられます。